



ボクはいいの  
鶴も社会運動も、つがいだ舞う

先日、札幌に招かれて、就労支援のシンポジウムに参加し、障がい者の就労支援に取り組んでいるNPOライフの人など、たくさんの人に出会った。その一つ、(株)シムスというビルメンテナンスと介護サービスを営んでいる会社は、かつて労働運動で名を馳せた炭労をルーツに持っていることを知った。現社長の御尊父は、炭労の活動家で、炭坑が次々と閉鎖されていくなかで、離職者の再出発を応援するための社団法人を興され、歳月を経て、いま御子息が社会的企業として跡を継がれていた。ボクにとっては、その社史がとても新鮮だった。日本の産業構造は大きく変貌し、派遣村に象徴されるように多数の犠牲者も出た。炭労もまた、かつて同じような運命に弄ばれた。日本の建設産業を支え、いま、その一部は野宿生活さえ送らざるをえないあいりん地区の労働者の過酷な運命とも重なる。都市生活関連産業という新しい分野への産業、労働政策の移行をあれこれ模索してきたボクには、あの炭労が新しい道を求めて葛藤していた歴史を垣間見、代を継いで、「福祉を興す」道を耕そうとされていることに、強い共感を覚えた。

そういえば、ボクは、青春時代、幾人かの三池炭鉱労組や水俣のチッソ労組の出身で、総評という労

働組合のナショナルセンターの「オルグ」をされていた人々と出会っている。みな酒がめっぽう強く、豪傑だったが、きまって泣き上戸だった気がする。その頃、ボクは、彼らは、三池闘争の夢再びと新しい戦場に馳せ参じておられるとばかり思っていた。そうだったのだろうか、それだけではなかったのかもしれない。ボクとほぼ同時代に労働運動や反戦運動から、障がい者の作業所づくりに活動を移し、いま、社会的企業を志向する人も幾人か知っている。

ある時、時代に翻弄されながらラディカルに生き、場面は変わっても、労働運動、社会運動の代を継いで生きてきた人々は、労働運動や社会運動の「運動」ではなく、「労働」と「社会」という「片割れ」を振り返り、問い直す役割があるのではないかと思った。ボクは、とりあえず、「働かなければならない」から「働きたい」へ、と言い続けてきた。「やってあげる」「やってもらう」から「やっていこう」へ、とも言ってきた。ボクは、今度は「斜に構えず」、「覇も競わず」、ラディカルな「運動」が、「片割れ」を得て、鶴のように空を舞う夢を見ながら、空路大阪に向かった。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



アナログレコードの逆襲その23  
浅川マキ「ちっちゃな時から」／アルバム「MAKI」から

発売されたもので、浅川の最初のアルバムと考えられる。ジャズテイストを持ちながら、当時日本ではまだ珍しいリズム&ブルースを歌う稀有な歌手だった。

「ちっちゃな時から 浮気なおまえで いつもはらはらする おいらはピエロさ さよなら お嫁に行っちゃうんだろ いまさら気にするのか 俺を」。 「ちっちゃなときから」は、軽快なホーンが曲のアクセントを奏でながら、浅川のソウルフルで重量感ある声が押しまくってくる。ちよっと不良っぽく、ちよっと可愛らしい曲で、僕は何よりポップな仕上がりが好きだった。

浅川マキのコンサートがミナミの島之内教会であったのは、EXPO70が終わった数年後のことだった。確か東京の「ジュアンジュアン」とかいうジャズハウスを拠点に、黒づくめのスタイルで歌っていた異色の歌手で、僕らはラジオから流れてくる彼女の素晴らしい歌を初めて知ったのである。島之内のコンサートの際、観客のおしゃべりを「私の歌を聞けないなら出てってよ」としかり飛ばしていたのを見て、スゴイ姉ちゃんだと感心したことを覚えてる。このレコードはその前後に

なった。そしてもう一曲。この作品集の中では特異な作品「赤い橋」が挿入されている。――不思議な橋がこの街にある 渡った人は帰らない 昔 むかしから橋は変わらない 水は流れない いつの日も 不思議な橋が この街にある 渡った人は帰らない。この曲の作詞者が北山修であった、ということを数年前知った。

心の迷路を非現実的な言葉を織り込んで浅川が歌うというスタイルで、後年、中島みゆきが歌う「あぶな坂」

(アルバム「私の声が聞こえますか」から)は、まさに中島がこの曲に触発され、返歌として歌ったと思えるぐらいにシニール感が相似する。――あぶな坂を超えたところに あたしは住んでいる 坂を越えてくる人たちは みんな けがをしてくる(以下略)――。

異端にして異才、浅川の系譜を中島は受継いでいるのではないか。次号では中島みゆきのアルバムに話題を移してこの続きを試みたい。